

アドルフ・ロースの建築における身体への意識
— 19世紀末ウィーンにおける建築と衣服の関係をを通して —

アドルフ・ロース研究出版ゼミ
安藤悠*

アドルフ・ロース Ins Leere Gesprochen ウィーン分離派
ウィーン工房 ドイツ工作連盟

0. はじめに



図1 『アドルフ・ロースアパートメント』リナ・ロース寝室

アドルフ・ロース^{*1}の建築作品には、身体の動きを建築空間に反映させたような特徴がみられる。例えば『アドルフ・ロースアパートメント』リナ・ロースの寝室

室に見られる絨毯の使用法がそうである。——ロースは建築の内部空間をどのように捉えていたのだろうか——アドルフ・ロースは1898年、新聞上に当時開催されていた展覧会のレビューを書いており^{*2}、そこに書かれた論考はその後『Ins Leere Gesprochen』^{*3}という論考集にまとめられている。こうした背景から、この論考集は多岐に渡る分野が断片的に扱われている。これまでのロース研究では、この論考集が網羅的に扱われる事は少なく、全体像の把握が出来ていないのが現状である。ロースの建築内部に関する研究では、これまで・空間構成・無装飾・材料の特殊な使用法・古典的断片の使用といった特質を挙げて分析がなされ^{*4}、その他には「触覚的空間」「子宮的空間」といった感覚的表現がなされてきました^{*5}。本研究では、この感覚的表現がなされてきた部分を、分野の関係という視点のもと言説を網羅的に分析し、それを同時代の建築家の思想と比較することで、彼の思想の特異点を抽出する。また、建築家の作品を読解し、前述したロース建築内部の特徴の要因を明らかにする事を目的とする。

1. 『Ins Leere Gesprochen』における分野の連関

1-2 所収論考と批評対象の整理

『Ins Leere Gesprochen』に所収されている断片的な論考をロースの言説に従い整理すると、そこに登場する様々な物は、「調度品」「工芸品」「男性服」といった言葉で括弧され、さらに「インテリア」「建築」「服装」に内包される関係である事が分かった。つまり、この論考集は「建築」と「衣服」とに大別され、そこに含まれないものとして、「馬車」と「印刷物」がある事が分かった。

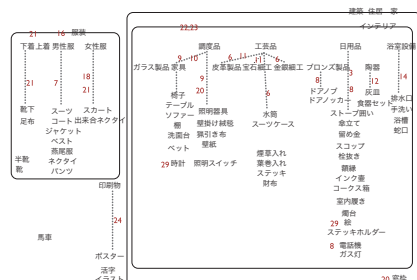


図2 『Ins Leere Gesprochen』批評対象の分類^{*6}

1-3 住居空間と身体

●室内調度品 「椅子のデザインについては、まず何より「座る」という所作に通じていることが大切である...」^{*7} ロースは、空間や家具を行為と関連付けて語る際に「椅子」を取り上げて説明を行う事が多い。彼は、ここで「椅子」を「座る」行為と密接に関わる事項として扱っている。こうした生活行為と物との関わりは、物の「実用性」と関係し、椅子に限らず調度品全体に対して、その重要性が説かれる^{*8}。また、調度品の持つ自己表現の特性について、「王は王らしく、市民は市民らしく、農民は農民らしく、家具調度品を通して自分たちの特性を表現するよう、しつらえればよい。」^{*9}と言及しており、物理的だけでなく精神的にも身体と関連づけて考えていたことが分かった。

●住居空間 「自分の家に持ち込もうとしていた本来の意味での様式を、我々はとうとうもつことになる。それはひとり人間、ひとつの家族の趣味のあり方によって形となって生まれてくるものなのだ。」^{*10} ここで彼は、住居空間に置かれる家具や調度品は所有者（家族）によって選択されている為に、空間にはその所有者の趣味が反映されるとしている。この「家族の様式」「家族の趣味」といった言葉に表現されるように、ロースはここで人と住居空間との深い関係を示唆している。しかし、一方で、居住目的でない家の空間については、「住むことによって成長していく部屋とは別に、もちろん居住目的ではない空間がある。... 客人を迎え入れる空間、供宴を催す空間、居住以外の用途で使用する空間にはその専門業者にやらせる必要がある。」^{*11}と発言をしており、ここでは住人の精神が表現されない事がわかる。

1-4 衣服と身体

●靴 「われらの足も変わりゆく。小さくなり、大きくなり、長くなり、幅広くなる。それにあわせ靴職人も靴を大きくし、小さくし、長くし、幅広くする。」^{*12} ロースは靴製作に重要な要素として「足の形」「歩き方」「習慣」を挙げ、靴と体との関係を指摘する。また、彼は『Ins Leere Gesprochen』の所収論考の内、2編の論考^{*13}を靴業界に割いており、身体形状や行為と靴との関係を説いている。このことから、衣服の中でも靴を身体と密接に関わる事項として扱ったことが分かった。

●紳士服、女性服 「ある服装が現代的であるのは、文化の中心の最上級社会において、その時々に応じて可能な限り目立たない場合である。」^{*14} ロースは衣服の他人の目に触れる部分に関して、「目立たない」ことを「正しい」とした。また、衣服におけるモードについて、男の場合「差別化」欲求に因って、女の場合は「(男の)エロスのあり

かたの変化」^{*15}によって変化するとし、共に他者に起因していることが分かった。

1-5 建築と衣服の関係

●**身体の覆い** ロース論考の中で、衣服と建築を直接関連づける手がかりとなるのが、論考「被覆の原理」^{*16}である。この中で彼は、身体の覆いが建築の始まりであるとし、建築家の使命はこの「覆い」を作る事を第一義とすべきと述べている。身体の覆いとは即ち衣服の原型であり、ロースは建築空間にこれを反映する考えを持っていた。本論文のタイトルにある「建築における身体」とは、このような建築空間に反映された身体の覆いの性質を指す。ロース論考の分野の関係を図化すると、建築と衣服は身体を中心にして、同じような形をとっていたが、別次元で語られ、共存しない関係にあった事が分かった。つまり、「身体の覆い」から衣服と建築という性質の異なる二つの覆いに分岐したものの、一つの覆いしか必要としないという考えである。

●**建築家の役割** この中で建築家の役割についてロースは、「暖かく快適な空間を作り出す」^{*17} 為に、実用的な家具を扱い、空間を作り出すべきだとし、建築家をデザイナーではなく、良い調度品を選択し配置するコーディネーター的存在と位置づけていた。また、衣服の分野にも、このコーディネーターの役割を担う者として、「仕立屋兼洋装店」という職業が登場し、彼はこの職業の仕事に対し、「店の役割は、芸術家に対するコレクター、あるいはギャラリーの館長に似ている。豊富な商品の中から、客のためにベストなものを選ぶのが仕事なのだ。これはひとびとの暮らしを豊かにするための精神労働であるといえよう。」^{*18} と述べ、そのコーディネーターとしての役割を指摘している。

2. 世紀末ウィーンの建築と衣服を巡る思想

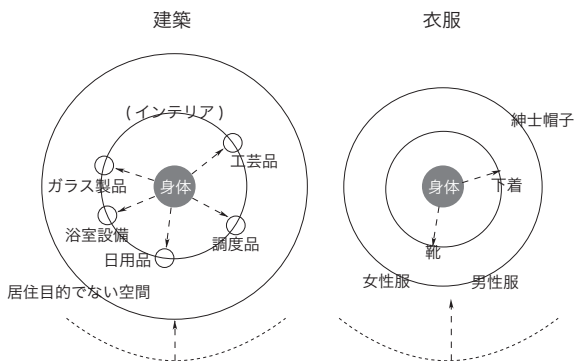


図3 『Ins Leere Gesprochen』における分野の連関

19世紀末ウィーンでは、建築家や画家、その他様々なジャンルの専門家が協同して芸術家集団を形成した。その代表例がウィーン分離派^{*19}とその思想を受け継ぐ製作集団、ウィーン工房^{*20}である。また、ドイツ工作連盟もウィーン分離派所属の芸術家が参加しており、同じような思想を持っていた。本章では、これらの芸術家集団の思想をロースの思想と比較する。

2-3 ウィーン分離派・ウィーン工房の思想と分野の連関

「芸術工芸産業集団労働綱領」^{*21}によると、彼らは家・空間・戸棚・道具・衣服・装飾といった日常生活にまつわる物全てを時代の精神のもと調和させる事を目指していた。これは世紀末ウィーンで一世風靡することとなる「総合芸術」的思想^{*22}の先駆けである。

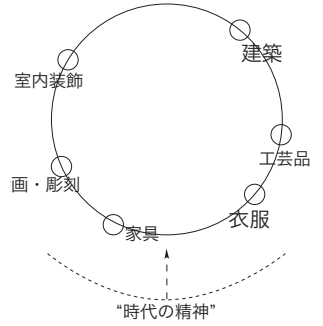


図4 総合芸術思想における分野の連関

2-4 ドイツ工作連盟の思想と分野の連関

「工作連盟の目標」^{*23}によると、彼らは、全ての工芸よりも建築に主眼を置き、その傘下で全ての工芸を調和させる事を目指していた。この思想は基本的には総合芸術思想の流れを汲んでいるが、建築を全ての統合体とし、上位に置いている点で分離派のそれとは異なっている。

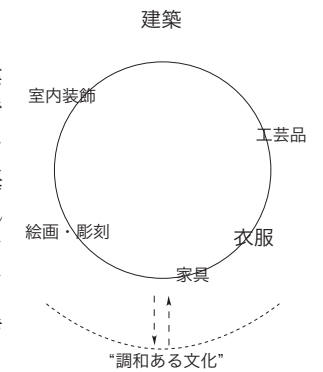


図5 ドイツ工作連盟における分野の連関

2-5 建築と衣服の関係

先ほどのロース論考の思想と比較すると、三者に共通して言えるのは、建築をある集合体を統括するものであったり、一つの統合体を形作る要素として、何かとの関係の中で捉えていた事。それゆえに、総合体の「調和」を意識していた事がわかる。これには、それまでの時代に備わっていた「様式」というものが破綻し、新たな時代を模索する時代であったという背景が関係している^{*24}。しかし、それに対する回答の仕方は三者三様で、ロースは身体の覆いとして実利的精神のもとに、調和を生もうとし、分離派は新しい様式の内に全ての事物を集約させようとし、工作連盟は全てのものを「建築」という統合体に昇華させようとした。ロースの特異点は建築を衣服とは別の形を持つ、身体の覆いと捉えた所にあり、建築と衣服を共存しない関係に置いた事だといえる。

3. 建築家によるインテリア・家具・衣服デザイン

当時、多くの建築家が建築だけでなく、インテリア・家具・衣服の製作を行っていた。ここではそうした建築家達の実作を身体という切り口をもって分析していった。

3-2 建築家の製作領域

	ロース	ワグナー	ホフマン	モーザー	オルブリヒ	ベッヒェ	ウィーン工房	ヴェルデ	ドイツ工作連盟
建築	○	○	○	○	○	○	○	○	○
内装	○	○	○	○	○	○	○	○	○
家具	○	○	○	○	○	○	○	○	○
室内調度品	○	○	○	○	○	○	○	○	○
室内小物	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○
衣服	○	○	○	○	○	○	○	○	○
服飾小物	○	○	○	○	○	○	○	○	○
印刷物	○	○	○	○	○	○	○	○	○
絵画	○	○	○	○	○	○	○	○	○
テキスタイル	○	○	○	○	○	○	○	○	○

図6 建築家の製作領域

* 早稲田大学創造理工学研究科 修士課程

*Graduate student, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.

** 早稲田大学創造理工学研究科 助教授・工博

** Associate Prof, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng

まず、前提としておさえておきたいのが、それぞれの建築家の持つ製作領域である。この表でしめたように、集団に所属する建築家の場合、集団の持つ製作領域と個人の製作領域は一致せず、それぞれの構成員が自分の製作領域をもちつつ、集団としてはじめて生活にまつわる一切を手がける事が出来たことが分かる。

3-3 調度品製作の姿勢

●椅子 まずロースの《カフェ・カプアの椅子》^{*25}です。

この椅子は完成までに2つの段階を経ています。基本形となっているのは、トーネットの《No. 14》^{*26}、そこから人間の座る姿勢から背面部を湾曲させる等の改良を行い完成したのが、真ん中の《カフェ・ムゼウムの椅子》^{*27}。そこから、さらにカフェでの使用頻度の高さから強度を増して作られたのが、この《カフェ・カプアの椅子》である。このようにロース



図7 ロース《カフェ・カプアの椅子》

はまず、最適な基本形を既存のものから選択し、そこから状況にあわせて改変を加えるという行程で製作を行った。これは、ロースの言う、コーディネーターとしての建築家の役割に即しているといえる。一方、モーザー^{*28}の《サナトリウム待合室のための椅子》^{*29}では、椅子と空間装飾双方に幾何学模様が基調とされ、空間の調和を意識した製作がされている。これは、工場の総合芸術思想を体現している。

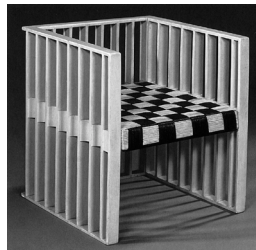


図8 モーザー
《サナトリウム待合室のための椅子》

●衣服 椅子でみたウィーン工房の手法は、衣服と空間の間でも適応されている。また、ドイツ工作連盟のアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ^{*30}の衣服には、壁にかけられた絵と同一の様子が施され、衣服と建築を同調させようという意識がみられる。このように、ウィーン工房やドイツ工作連盟では、空間に存在する人間を含めて空間全体の調和が考えられていた。



図9 ヴァン・デ・ヴェルデ《改良服》

3-4 室内空間の調和

●暖炉周りの調度 この2つの空間は、居間の横に設けられた小スペースである。両者には同様の家具配置が見られるが、ロース設計の空間で作り付け家具が使用されているのに対し、ホフマン^{*31}設計の空間では家具調度に同一模様を施すことで、建築と一体化させている。

●壁面の調度 壁面の調度において、両者には同じ性質がみられる。それが、ここに挙げた2枚の写真に見られる壁紙とカーテンの模様の統一である。ホフマンをはじめ

ウィーン工房の作品にはこの性質が至る所に確認される。一方、ロースがこの手法を用いる箇所は寝室に限定されている事が分かった。

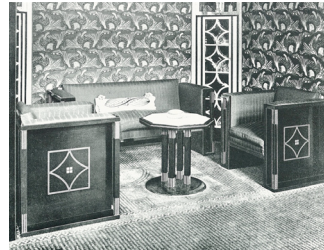


図10 ホフマン《サロン》



図11 ロース《ルドルフクラウス邸》居間

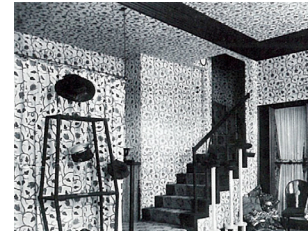


図12 ホフマン《ウィーン工房服飾部門》



図13 ロース《ミュラー邸》寝室

3-5 室内描写の手法

ウィーン工房の様相を統一させる手法は、彼らが描いた住居空間の絵葉書^{*32}に分かりやすく表現されている。これはホフマンによる住居空間の絵であるが、非常に平面的で、模様によって、家具と内装の境界が曖昧に表現されている。ウィーン工房がこの手法を用いた事には、複数のデザイナーが参加する製作スタイルが起因している。つまり、一人一人が製作したものを一つの調和のとれた作品にする際に、有用であったのである。

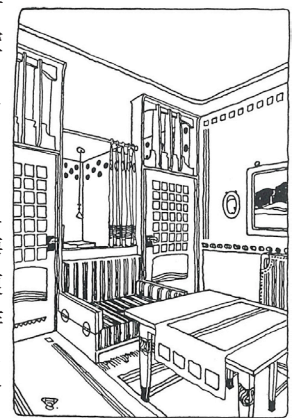


図14 ホフマン《室内》

4. 建築空間における身体

第四章では、ロースの作品の中でも、冒頭であげたような身体を意識させる特徴をもつ空間について分析を行った。

●階段の造形 この階段が使われている二軒の住宅は、小規模であるという共通点がある^{*33}。そこで、本来一つの空間を、階段によって上下2層にわけ、平面積を増やす工夫がなされ、階段の勾配はきつくなっている。つまり、この湾曲した踏み板の造形は、少しでも上り下りがしやすくなるよう、実用性を考えて作られているという事である。ここから、この階段はロースにとって、空間というより、椅子や他の家具のような一つの実用品として製作された



図15 《労働者のための住居》階段



図16 《ルーファー邸》階

考えられる。

●寝室の調度 ロースの設計する寝室空間は、彼が行う他の空間とは異なる独特な雰囲気をもつ。空間全体が絨毯で覆われていたり、寝具が壁に吸収されたりと、建築と家具とが一体となり、そのみで空間を成立させている。つまり、彼の言う「身体の覆い」という建築の原型が寝室に表現されているといえる。《アドルフ・ロース アパートメント》リナ・ロースの寝室はこれまでの研究の中でも「衣服的な空間」^{*34}と表現されてきましたが、建築の原型が衣服の原型と一致するロースの思想を考慮すると、この寝室は衣服の原型の表現でもあることになり、このような印象を与えたと考えられる。なぜ、寝室において、このような手法がとられたのか、彼の被覆論が元になっているゼンパーの言説を参照するとゼンパーは「寝床を整える事」^{*35}を建築と衣服の原型としており、寝室空間は住居の中でも建築の原型に最も近い空間であり、ロースにもこの考えが受け継がれたと考えられる。



図17《コーナー邸》寝室

考察

ここで、ロースの代表作でもある《ロースハウス》(1911)について、考察を行った。ロースハウスは当初、紳士服店ゴールドマンザラチュの店舗として設計され、店舗としての特質故にそこには客と店員という2つの主体が存在する。店員を主体とする仕立て空間と、客を主体とする店舗空間である。仕立て空間では調度品が白く塗られ、鉄を用いた非常に機能的な印象がある。これは、住居空間と同じく、実用性を重視した内部であるといえる。一方、店舗空間は店にとっては外部に接する部分であり、外部空間と同調するように作られている。これは、店舗空間の主体である客が衣服という覆いを既に身につけているため、建築という覆いを必要とせず、それゆえ店舗部分は外部的であつたといえる。つまり、店舗部分では衣服が「身体の覆い」であり、仕立て空間では建築が「身体の覆い」として機能し、それらは同時に存在しないということがここから、見て取れると考察した。

結論

世紀末の建築家達は、建築をある集合の要素であったり、集合を統括するものとして、調度品や家具などの関係の中で捉えていた。その中で、ロースの思想の特異点は、衣服と建築を共存しない関係においた点にある。冒頭に挙げたロースの階段に見られる身体と建築とを直接繋ぐような手法は、空間を椅子や他の家具同様、一つの実用品として扱ったためだと考えられる。また、寝室にみられる特徴は、彼が衣服と建築とを共存しない物と考えた事で、建築に一枚の身体の覆いとしての性質が色濃く、表出したのである。そして、このような設計を可能にした背景には、ロースが集団に所属せず、一人で製作を行った事が要因しているといえる。

主な既往研究

- 「Ins Leere Gesprochen」と建築作品を対応させる研究
- Heinrich Kulka 『Adolf Loos: Das Werk des Architekten』(A. Schroll & Co.,1931)
- Massimo Cacciari 『Architecture and nihilism』(Yale University Press,1993)
- Ludwig Münz 『Adolf Loos: pioneer of modern architecture』(1966)
- Colomina, B. 『Privacy and Publicity: Modern Architecture as Mass Media』(1994)
- 河田智成 『アドルフ・ロース 建築と言葉1-4』(建築学会機関,1995-1996)
- 田中純 『着衣の作法—アドルフ・ロースのダンディズム』、『彫像の中の建築』(未来社,1995年)
- 同時代の建築家に関する研究
- ・Roberto Festi 『Wiener Interieurs: Entwürfe 1900/1915』(1994)
- ・Christan Brandstätter 『Design der Wiener Werkstätte 1903-1932』(2004)
- ・Walter Zedniecek 『Josef Hoffmann und die Wiener Werkstätte』(2006)
- ・August Sarnitz 『HOFFMANN 1870-1956』(2007)
- ・Peter Noever 『Josef Hoffmann Ein unaufhörlicher Prozess』(2010)
- ・Ralf Beil 編 『Josef maria OLBRIICH』(2010)
- ・プレントラスト編 『ウィーン、生活と美術:1873-1938』(2001)
- ・新見隆編 『ウィーン工房 1903-1932 モダニズムの装飾的精神』(2011)
- ・セゾン美術館編 『ウィーン世紀末:クリムト、シーレとその時代』(1989)
- ・ウルリヒ・クラフツ編,阿部公正訳 『世界建築宣言文集』(彰国社,1970)
- ・時田仁弘 『芸術家コロニー+アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ:初期モダニズム』(2007)
- ・長谷川章 『世紀末の都市と身体』(2000)
- ・ケネス・フランプトン著,松田強,山本想太郎訳 『テクニク・カルチャー』(TOTO出版,2002)
- ・ケネス・フランプトン著,中村敏男訳 『現代建築史』(青土社,2003)

参考文献(一部抜粋)

- Adolf Loos 『Ins Leere Gesprochen』(1921)
- Adolf Loos 『Spoken into the void』(1982)
- アドルフ・ロース著,伊藤哲夫訳 『装飾と罪悪』(1987)
- [アドルフ・ロース研究]
- Burkhardt Rukschcio 『Adolf Loos leben und werk』(Residenz Verlag,1987)
- Janet Stewart 『Fashioning Vienne』(Routledge,2000)
- Panayotis Tournikiotis 『Adolf loos』(Princeton Architectural Press,2002)
- Ralf Bock 『Adolf Loos works and projects』(skira,2007)
- Roberto Schezen 『Adolf loos architecture 1903-1932』(Monacelli press 1996)
- 川向正人 『アドルフ・ロース—世紀末の建築言語ゲーム』(1987)
- 伊藤哲夫 『アドルフ・ロース』(1980)
- ケネス・フランプトン 『テクニクカルチャー』
- [同時代の建築界]
- オットー・ヴァーグナー著,樋口清,佐久間博訳 『近代建築:学生に与える建築手引き』(1895)
- ゴットフリート・ゼムパー 『様式論』(1860)
- 大倉三郎 『ゴットフリート・ゼムパーの建築論的研究』(1992)
- Herausgegeben von Christian Brandstätter 『Wien1900 Kunst und Kultur』(2005)
- [アーツ・アンド・クラフツ]
- ウィリアム・モリス 『芸術・豊かさ・富』(1883)
- ウィリアム・モリス 『芸術の目的』(1886)
- 小野二郎 『ウィリアム・モリス—ラディカル・デザインの思想』(1992)
- [その他]
- 黒石いずみ 『アダムの家—建築の原型とその展開』(1995,鹿島出版)
- 石谷治寛 『十九世紀末の芸術をめぐる労働の科学と身体のリズム』(2009)
- 註
- *1 Adolf Loos(1870-1933) *2 1898年ウィーンのプラター公園で開催された「皇帝即位50周年記念展覧会」の展示会レビュエとして、有力紙「ノイエ・フライエ・プレッセ」の文芸欄に連載していた論考。
- *3 *2で書かれた論考を中心に、*4 ロースの弟子であるハインリヒクルカがロース建築の特徴として列挙したもの。*5 ピアトリス・コロミーナが著書「マスメディアとしての近代建築」の中で使っている表現。*6 論考集「Ins Leere Gesprochen」の中で、ロース自身が分野の連関を明言している箇所を反映したもの。因中にある番号は、根拠となる発言がある論考の日次番号である。*7 「工芸家の学校展示会」より引用。*8 ロースは論考「ガラスと陶土」において「実用品すべての中に、その民族の習慣とキャラクターを読み取ることが出来る。」と発言し、この他の論考においても度々、物の実用性について説かれている。*9 「オーストリア博物館のクリスマス展示会」より引用。*10 「ロンドンにおけるインテリア」より引用。*11 「オーストリア博物館のクリスマス展示会」より引用。*12 「靴」より引用。*13 全29編の論考中「靴」「靴職人」という2編の論考で靴業界のみに焦点を当てた批評を行っている。
- *14 「紳士のモード」をもとに筆者編集。*15 「私たちのモード」より引用。*16 1898年9月4日付けの新聞「ノイエ・フライエ・プレッセ」で発表したのが初出。本論考集の中で、中核となる論考で、これまでの研究でも度々参照されてきた。*17 「被覆の原理」より抜粋。*18 「下着」より引用。
- *19 ウィーン分離派は1897年にクリムトを中心として発足した芸術家集団で、建築家のホフマン、オルブリヒ、ワーグナーやデザイナーのモーザーなどが参加していた。*20 ウィーン工房は、分離派の会長が関わった事によって、脱退したホフマン、モーザーらが1903年に発足した。初期分離派の総合芸術思想を受け継ぎ、その実践的活動(製作活動)を行う拠点として開設された。*18 「下着」より引用。*21 著者は不明だが、おそらくホフマンによって書かれたものだとされているウィーン工房の綱領。1905年に発表されている。*22 総合芸術思想とは、建築とその他全てのものを一体的に考える思想のことである。*23 ヘルマン・ムテジウスによって書かれたドイツ工作連盟の目標。1914年には、同じくムテジウスによって「工作連盟の綱領」が書かれるが、そこで工作連盟の主要メンバーであるヴァン・デ・ヴェルデと意見が割れ、「規格化論争」に発展する。*24 「ドイツ工作連盟」「世紀末の都市と身体」など世紀末に関する既往研究において指摘されている。*25 1913年に製作された椅子。同じくロース設計の《カフェ・カファ》で使用するために作られた。*26 トーネット社が製作した、曲木の椅子。ロースはトーネットの椅子について、「トーネットの椅子を見よ!カーブした脚と背もたれ、装飾を排し、座るといふ行為を具体化したこの椅子」と述べ、賛辞を送っている。*27 ロースの代表作でもある《カフェ・ムゼウム》で使用された椅子。*28 コロマン・モーザー(Koloman Moser, 1868-1918)。ホフマンと共にウィーン工房を設立したメンバーの一人。ウィーン工房では、内装や衣服、工芸品などの製作を行う中心人物でホフマンからの信頼も厚い。*29 1903年に、ホフマンが設計した《サナトリウム》の待合室のために製作された椅子。*30 アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ(Henry van de Velde, 1863-1957)。モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動から影響を受け、自然界の有機な線や構造を作品に応用した作風を持つ。*31 ヨゼフ・ホフマン(Josef Franz Maria Hoffmann, 1870-1956) *32 ウィーン工房は自身の印刷所を有し、1000を超える絵葉書が出版された。彼らは、これらの絵葉書を絵画と同じく芸術作品として扱い、製作をおこなっていた。*33 参考、Burkhardt Rukschcio 『Adolf Loos leben und werk』。*34 ロース研究者のピアトリス・コロミーナが著書の中で、用いた表現。*35 ゼンパー 『様式論』の中の「被覆」の章での一説。